

明治四十二年九月

史學
研究會
講演集
第二冊

東京
合資
會社
富山房發行

史學研究會 講演集第二冊

總目次



宋學傳來の淵源

西村時彦

一—四七

長白山附近の地勢及び松花江水源

附完顏城址考

五〇—二六

理學博士 小川琢治

東洋史の研究に就きて

二七—三九

伯爵 大谷光瑞

碧山日録の著者に就きて

三—五三

上村觀光

雜錄

貝原益軒と京都地方

文學士 伊東尾四郎

貝原益軒の書翰

文學士 幸田成友

彙報

一六三—一六九

一五三—一六一

口繪目次

- 第一圖 白頭山火口湖鬪門池
- 第二圖 白頭山分水嶺定界碑
- 第三圖 松花江上流古洞河娘娘庫河合流點
- 第四圖 全木材筏組場
- 第五圖 松花江(吉林府木材集積場)
- 第六圖 松花江(吉林府下流)
- 第七圖 雲頭城古瓦反文天字瓦(中央墟址)
- 第八圖 全王字瓦(同右)
- 第九圖 全地字瓦(同右)
- 第十圖 已字瓦(同右)
- 第十一圖 全巳丑年字瓦(南門石壁)
- 第十二圖 全反文六月字瓦(中央墟址)

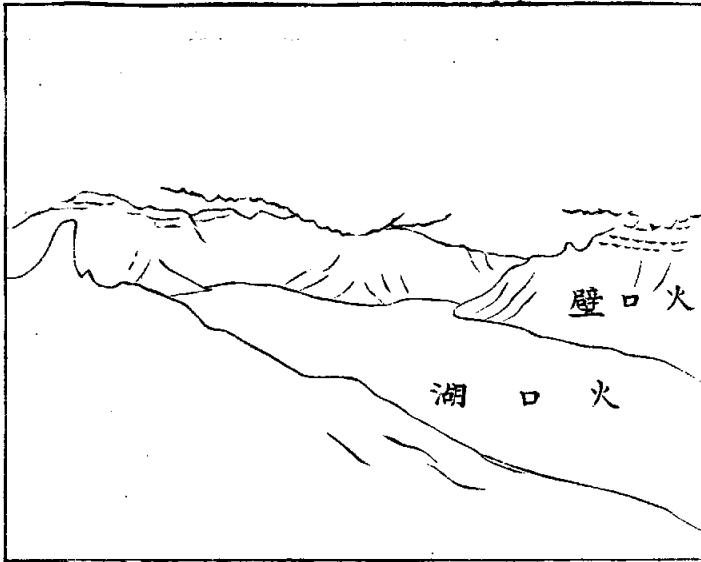
長白山附近地勢及松花江水源

會員理學士 小川 琢 治

目次

- 一、緒言.....五七
- 二、三江水源地之地勢.....五九
- 三、白頭山.....六五
- 四、長山嶺下畔嶺及北甌山.....七一
- 五、牡丹嶺.....七六
- 六、松花江の水源.....七七
- 七、混同江の水源.....七八

八、	粟末水の水源……………	八九
九、	松花江名稱の變遷……………	一一二
十、	完顔城の古址……………	一一五



第二圖

大清

烏喇總管穆克登奉

旨查邊至此審視西為鴨綠東

為土門故於分水嶺上勒

石為記

康熙五十一年五月十五日

筆帖式蘇爾昌通官二哥

朝鮮軍官李義復趙臺相差使官

許樞朴道常通官金應憲金慶門

長白山附近地勢及松花江水源

附完顏城址考

會員理學士 小川 琢 治

一、緒 言

明治四十年七月より四十二年二月に至る間に滿韓交界地たる間島に出張し、豆滿江の水源地々方を旅行せるが、其際白頭山附近及び松花江水源地方の地勢に就き考究するの機會を得たり。鴨綠江の方面に至りては、松花江との關係上二三の考證を試みたるに止るも、問題の中心を白頭山に取りたるが

故に、茲に并せて之を略述するものとす。

我が日本群島に於ては、分水界は主要なる山脈の走向に一致し、宛も屋棟より雨水の相背流するが如き河流多ければ、水系の地勢に對する關係は甚だ簡單なり。大陸に於ては之に反し、時として水系は複雑を極めたることあり。亞弗利加大陸に於てニール、ニール、ザムベシ、コンゴの諸大河相互の關係は太だ錯綜して、之が水系上の探檢が亞弗利加の地理學上探檢の主要なる問題たり。亞細亞大陸に於ても同じく水系が主要なる地勢上の問題となり、現にメコン、メナム、イラワディ諸大河の上流は今尙ほ不明にして、支那古代に於て禹貢水經等の地理書が何れも力を河流の系統的記述に用ゐたるが如き、中世以後地理上の探檢に、元朱思本の黃河の溯源の如き、清努三

の溧河の順流の如き、源委の覈定を以て目的とせるもの多きも亦た同一の理由によれり。現に韓清兩國間の懸案たる間島境堺問題を見るに、同じく水系問題にして、殆ど全く清國官憲が白頭山下の定界碑に記せる土門なるものの位置を誤認せる結果と謂ふ可きものなり、今茲に主として松花江の水源に關する支那古代の名稱位置を論ずるの微意は最近支那地誌及び地圖上に見ゆる所の誤謬を指摘するに在り。

二、三江水源地方貌の成因

三江の水源地に此の如く複雑なる水系を生ぜるは、此地方の高原性なるが爲めにして、其現今の地勢は種々の地質上の營力の結果に外ならず、抑韓國の北部より滿洲の南部に亘りて山嶽の地盤を成せる岩石は花崗岩及び片麻岩大部分を占

め、局部に古生層及び中生層の被覆する處あり。中生層は主として珠羅紀砂岩より成り、古期の岩層より成れる彪然たる凸面の周邊及び其中間の窪地に堆積したる淡水堆積物なれば、木葉化石及び石炭床を含み、遼河の方面には寬城子より鐵嶺に至る間に露はれ、鴨綠江の方面にては賽馬集の窪地に於て之を採掘し、間島に於て海蘭、布爾哈通、兩河窪地は此の珠羅紀窪地の遺跡にして、同じく其邊縁花崗岩に接する處に石炭床ありて、二三の小煤窰の開かれたるあり。吾人の西崗、南崗、北崗と呼ぶ所の邱陵地は珠羅紀の砂岩より成り、之を破りて噴出せる響岩 Phonolite に似たる一種の玢岩 Porphyrite ありて、間島の帽兒山及び馬鞍山の如き急峻なる孤立峯を成せり。是に由て之を觀れば三江水源地方の基礎的地盤は珠羅紀に於て既に

大部分陸面として存し、地表營力に働かれて浸蝕削磨の極限に達し、緩慢なる波狀の面となれるものにして、即ち珠羅紀准平原 Penepplain of Jurassic Period と看做す可きものなり。

然るに第三紀 Tertiary Period の中頃以後に蒙古より滿洲朝鮮に亘る廣大なる地域に玄武岩を噴出せる一大火山力の活動ありて、此の准平原的高地の表面は平坦なる熔岩を以て被覆せられたり。白頭山の近附は其中心なるが如く、咸鏡道の東南に向ひて端川の舞水灘(ボリチン角 Cape Bolkin)に至りて海に入り東北は牡丹江即ち胡爾哈河の上流地方に及び、西北は海龍城寬街の地方に及び、豆滿江の支流なる海蘭河と松花江の東支流なる古洞河(即ち古の混洞江幹流)との間の分水嶺たる古の黒山即ち韓人の所謂北甌山の如きは、此玄武岩高原の最も著

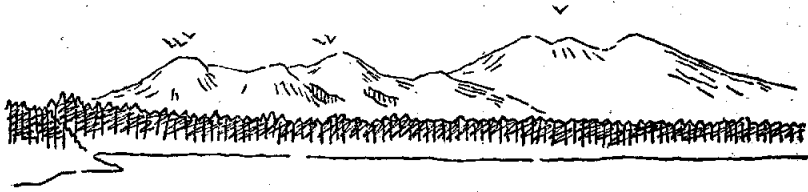
しき一例たるべし。其海拔一、六〇〇米に達し海蘭河二道溝より古洞河に通ずる重要なる街道たる窩集嶺に於て、二、二一〇米なるも、其北に於て尙ほ一、三〇〇米を保持し、哈爾巴嶺に向ひて緩斜するものとす。地圖上に於て北甌山の一帶は一に老嶺と稱する狹長なる分水山脈たるも、其地勢は全く平坦なる高原にして、清朝一統輿圖に平頂山なる名稱の此附近の山嶽に與られたるは是が爲めなり。

玄武岩噴出の時期は靜穩の時期に非ずして、土地の坼裂昇降之に伴ひて起り、隆起せる地方は河流の浸蝕力加はりて深き溪壑を生じ、地貌は一變し、北甌山に流れたる玄武岩最初の噴出の後幾回か噴出したるもの、白頭山附近の噴出の中心より、一回一回浸蝕の度を異にしたる谿谷に沿ひて流下したる形

跡は、豆滿江に於て明かに之を認むるを得べく、牡丹江の上流に於ても哈爾巴嶺に連れる青嶺(又は牡丹嶺)の熔岩高原の下に河流に沿ひて、大なる玄武岩流あり、鏡泊即ち畢爾騰湖は玄武岩流の間に生じ、此近傍の玄武岩流を被れる原野は支那人之を石頭甸子と呼ぶなり。

火山活動の最後は玄武岩質安山岩 Basaltic Andesite の噴出して、終に白頭山の火山錐 Volcanic Cone を生ぜるなり。其東南に亘たる大小騰脂峯、小白山も亦た火山錐なるが如く、未だ踏査を経ざるも北々西より南々東に走れる一坼裂線に沿ひて噴出せるものと推測せらるゝなり。而して此安山岩噴出の時期は北甌山玄武岩高原が既に深く浸蝕を被れる後に屬し、既成の水系は此新火山の發生によりて非常なる變化を被れるも

圖 一 第



小白山

大熊山

白頭山

のにして、現今見らるゝ所の白頭山を中心とせる放射狀の溪流 Radial Ravines と此の火山裾野の北麓を環流して此等の溪流を集むる所の松花江(二道江)とは、白頭山成生の結果として生ぜるものなり。松花江と豆滿江との中間に見る所の董棚水石乙水等の小溪流は何れも放射狀溪流にして、火山堆積物が北甌山の南なる長山嶺の西南突角に於て、北と東とに分岐する處に畧ぼ東北に流るゝものなれば久しく其水系の所屬を詳にせず、近年韓清勘界の際初めて明瞭となれるも蓋し偶然に非ざるなり。

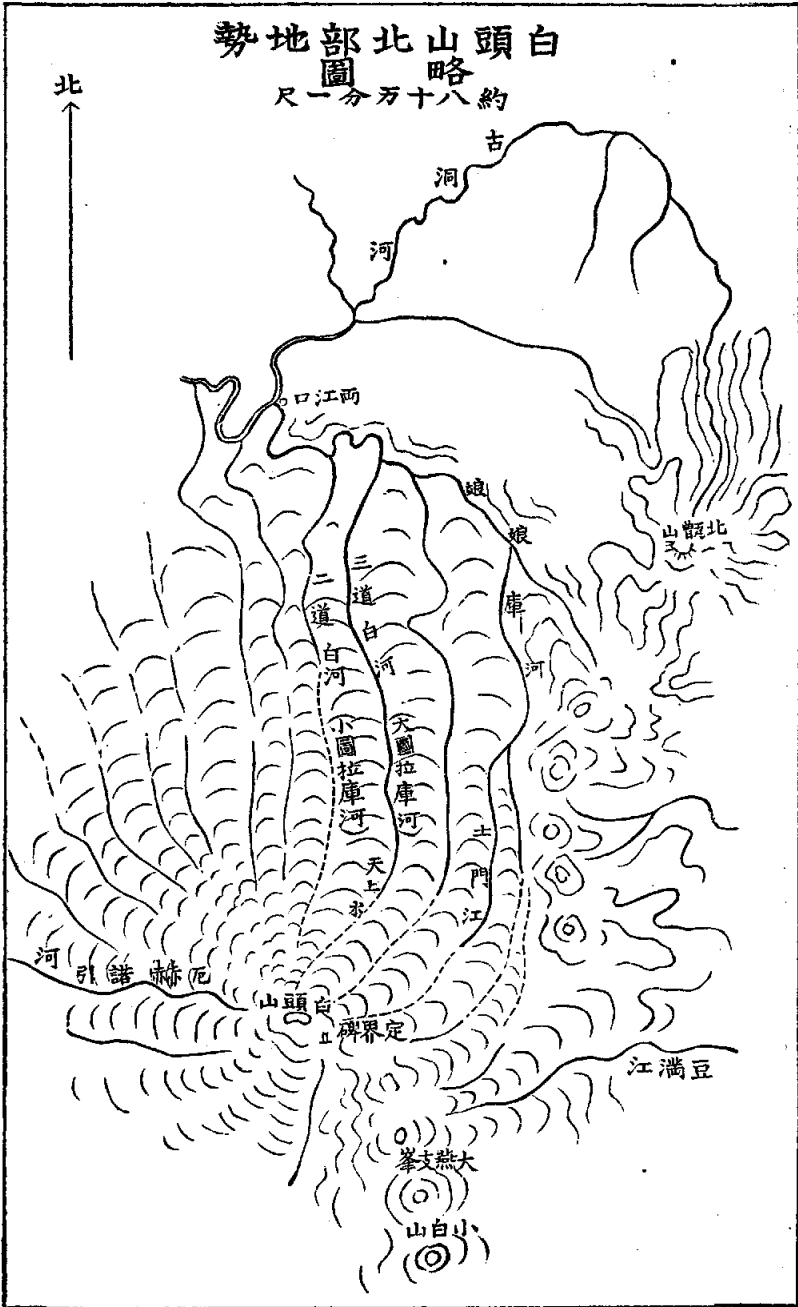
三、白頭山

白頭山は韓滿交界地の最高峰にして、海拔二、七三〇米あり、山巔に火口湖を有する一大火山にして、火口の周邊に堆積せる輕岩 Pumice 質の火砂堆積して缺頂圓錐を成し裾野狀の高原上に突起すること約五百米なり。康熙五十一年韓人の烏拉總管穆克登と共に此山に登れるもの、如覆白甕於高俎」との語あり、此火山を形容し得て妙なり中央の火口湖は曲玉形を成し、支那人之を闔門池と呼び、韓人は之を龍王潭と云ふ、火口壁は少くも百米以上の斷崖を成して直立せる處あり、熔岩及び拋出物層狀を成して露はる。周圍に五峯ありて北なるを白巖と云ひ其東南に兵使巖あり、其南に桃儿伊側其あり、其西を摩天巖といひ、是より北に廻りて層巖あり。層巖白巖相對峙し、其

圖 二 第

勢地部北山頭白
圖 略

尺一分万十八約



間に一溝ありて、天上水即ち松花江の水源は是より流出すと
假定せらる。此溝に對して南側より湖中に突出せる一嘴あり
て、湖面を縊りて東西二部と成せり。其半腹海拔千五百米以下
は全く針葉樹林を以て蔽はれ、山上には火口より噴出せる灰
白色輕岩の砂礫ありて草木を生せず。白頭山は其高度雪際に
達せざるも、古來白山の名あるもの、此輕岩の白色皚々、周邊の
黯綠黑色なる針葉樹林に反襯せるに因るものなり。茂山より
惠山鎮に通ずる虚項嶺は海拔約一、五〇〇米ありて、山頭の三
池淵を隔て、白頭山及び其南に連亘せる大臙脂峯及び小白
山を望み得べし(第二圖は虚項山嶺上よりの見取圖なり)

白頭山は韓稱にして、現今の支那人は之を長白山と呼び、滿
洲名果勒珊延阿林の意義に相當す。滿洲源流考の撰者は山海

經に「大荒之中有山名不咸在肅慎氏之國」と云ひ、晋書に「肅慎氏一名挹婁在不咸山北」と云へる不咸山は白頭山を指すものと考へたれども、肅慎民族の住地が何處なるやを確知し難ければ、從て不咸山も亦た不明なり。然れども、滿洲地方に於て最も著しき山なれば或は之に當るならん。此山の確實なる記事の初めて史乘に見えたるは魏書の徒太山北史の從太山なり。

「即ち魏書卷一百列傳勿吉國の項に「國南有徒太山、魏言太白、有虎豹羆狼害人、人不得山上洩汗、行逕山者皆以物盛去」とあり。

汲古閣本其他新版の魏書には「不害人」とあるも、宋版本には「不」の字なし。近時本邦人の登山者に聞く所によれば、白頭山附近虎羆の足跡苔に印せるものあり。甚だ猛獳にして人を害すと云ふ。舊版に從ふべきに似たり。

「北史卷九十四列傳勿吉國の項には「國南有從太山者、華言太皇、俗甚敬畏之人、不得山上洩汗、行經山者、以物盛去、上有熊羆豹狼、皆不害人、人亦不敢殺」とあ

り。

「皆不害人人亦不敢殺」の句は魏書より出でしものならん。前に掲けたる魏書汲古閣本及び他の新版に「害人を不害人」に作れるは北史「不害人」とあるより溯りて魏書を改竄せしか、抑又た現存舊版の誤謬なるか。北史古版本には尙ほ此他に誤謬と認めらるゝものあり。華言「太皇」といふが如きも、恐らくは「華言太白、土俗云々」の誤謬なるべし。

「其文魏書と大同小異にして徒太山を以て從太山に作る。二名何れか誤謬なるべく、恐らくは北史の從太山は徒太山の誤謬とすべきものならん。

新唐書亦た北狄列傳黑水靺鞨の項に「其著者曰粟末部居最南抵太白山亦曰徒太山」と見えたり。北史は又た粟末部を以て粟末に作れるが如き明白なる誤謬あれば魏書に従ふべきに似たり。

長白山の名は、初めて契丹國志及び金史に見え、爾來現今に至るまで支那人之を襲用し、朝鮮にては白頭山を以て知らる

なり。

白頭山は前に述べたるが如く一座の火山なれば、鴨綠豆滿兩江北の山嶽に命ずるに長白山脈の以てするは妥當ならず。單々大嶺、蓋馬大山の名書は及び後漢三國志魏志に見え、其正確なる位置明かならざるも、單々大嶺は南北の走向を有し朝鮮北部より滿洲に亘る分水界なるが如く、蓋馬大山亦た北韓に在るものゝ如く、此等は共に江北の山嶽の名稱として採るに足らざるに似たり。止むを得ずんば假に長白山を清朝一統輿圖に示す所の範圍に使用し、兩江北の山嶽の總稱とし、白頭山を以て火山の名として區別すべきなり。

吾人は長白山嶽を以て豆滿鴨綠兩江の北に蟠屈せる韓滿交界地帯の東北部の總稱とし、佟佳江以西及び以南の山嶽は

遼東山嶽なる名稱の下に包括せんとす。長白山嶽に屬する地方の主要なる分水界は西部に於て所謂老崗にして、白頭山の西麓より頭道に輝發河と遼河の諸支流との流域を堺する、略ぼ東西に走る一帯の高地にして、其西部は古の長嶺なるべく比較的平坦なる准平原狀の山嶽が河流によりて彫刻せられて生じたる六七百米乃至千三百米の山嶽にして、著しき高峯の突起するものなきに似たり。

四、長山嶺下畔嶺及北甌山

白頭山の東北麓より起りて東北に向ひて走り、白頭山の東腹を流るゝ董棚水及び定界碑に所謂土門江の諸水と、豆滿江の支流なる烏鳩江(朝鮮音 *Or-ku-gang*) 即ち吉林通志所謂外馬鹿溝との間の分水界を成して、北甌山に連れる一帯の山嶽あり。

是れ朝鮮に於て所謂長山嶺にして是より東に向ひて一支を出し、豆滿江の上流と烏鳩江との間に分水界を成せる山嶽あり。其高峯千四五百米に達す。

此山嶽は癸未(明治十六年)韓人金禹軾の探檢記事に據りて大勢を窺ふを得べし。曰く(定界)碑前東爲間峯、其東爲大角峯、(中畧)大角峯東前、有種種十數峯起立、其前脈隱伏東去、爲六七十里、爲長山嶺、嶺東後邊豆滿江源地也、長山嶺左右八字、皆爲長嶺也、正脈東北向疊々起、幾近二百里、有北甌山突起也、

此主要分水線は北甌山の西南に於て最も低き黃溝嶺(一、〇八五米)となり、松花江の上流娘娘庫河より豆滿江上流に通ずる一交通線に當れり。

此鞍部より以北は北甌山及び之より北走する朝鮮人の所

謂下畔嶺なるものにして、玄武岩を戴ける高原卓狀を成せり。北甌山は海拔一六八七米ありて、北に緩斜せる高原の南端最高部を占め、白頭山東北に於ける秀點にして鬱葱たる針葉樹林を以て蔽はるゝを以て、ヂェスキット教徒の一統圖に示せる黒山の名を生じたるべく、其北部に支那地圖平頂山なるものありも亦た地形に基ける名稱なり。北甌山とは豆滿江南の南甌山と相對せる朝鮮名にして、癸未(明治十六年)の金禹軾の烏鳩江畔の山小屋(人參採集者の設けたるもの)より北甌山に登れる記事あり。

絶壁十里稍平地、則東南翼也、有大小兩池、絶妙、北向十里上上角、絶壁五里、其上廣一里許、北向長五里許、高與白山齊、有石礪礪四望、則西南白山寶髻而已、正西一望無際、西北麓落去百里

許、如有甌山形山、即四方鄧子、其北花發嶺、分界江源也、清人僞名坪下通水(以下中略)大抵北甌山之南流、爲兀口江、東流爲恒引江、西流爲三大水、入于土門江、其山麓之疊々、水谷之深々、不知幾千萬矣(中略)其上穢蠅如雲、如霧、人之耳目口鼻、不能掩之、遍爲咀嗜。

寶鬚とは普臺山にして、小白山の南に突起せる一峯なり。四方鄧子は即ち平頂山なるか、或は之に達せる古洞河西の尼雅穆尼雅庫哈達(吉林通志)なるべく、花發嶺は即ち哈爾巴嶺坪下通河即ち布爾哈通河、兀口江即ち烏鳩江、恒引江即ち海蘭河にして、土門江即ち二道江なりとす。

北甌山の名は北路紀略に出で、其形甌の如しといひ、又た山上に城址ありと傳ふるは、想ふに玄武岩臺地の特色を誤認せ

るものならん。吉林の産物中に最も有名なる山藁(山人蔘)は此地方の森林中に産するものなり。

間島に住居する支那人の大穠稽朶山(吉林通志)と呼ぶは同じく此山にして、同じく其山巔の形狀を形容せるものと推測せらる。此高地の北部に稍低き處ありて、海蘭河の二道溝より古洞河に達する街道を通じ窩集嶺(海拔一、二一一米)の名あり。嶺北に於て再び一、三〇〇米に達する荒溝嶺あるも、是より更に北は陵夷して七八百米となり、哈爾巴嶺に連れり。此分水線は略ぼ南北の走向を有し、海蘭、布爾哈通兩河と二道江との流域を界するものなり。

五、牡丹嶺

松花江上流の二道江の流域と木旗河(穆禽河)其他の下支流

及び牡丹江との間に、略ぼ東西の走向を有する分水嶺あり。其西部に富爾嶺あり、其東に牡丹嶺あり、更に東に寒葱嶺あり。主として二道江と牡丹江との分水界たるものなれば、吾人は之を總稱するに牡丹嶺の名を以てすべし。

佛思亨山、長嶺、薩哈亮阿林等の松花江水源西部の山嶽は未だ詳密なる地圖に就きて研究するの機會なきを以て、今姑く之を省略す。

六、松花江の水源

松花江の流域は未だ之を踏査するの機會なく、又た全部に亘る完全なる地圖を有せざるが故に、其地貌を詳にせざるも、内外旅行家の報告を参照して其大勢を窺ふを得べし。

松花江の水源地は白頭山より西走する支脈斐德里山より

分岐して北走する佛思亭山及び伊爾哈雅範諸山により分たれて、東西二部となり、其東なるものは現今所謂頭道、二道兩江の流域に屬し、白頭山北麓及び西北麓の諸水を聚めて北流するものなり。其西なるものは現名輝發河の流域にして、佛思亭山、老崗薩、哈亮阿林の諸山嶽に圍繞せられ遼河の流域に接せるものなり。

支那文書を按ずるに、現今は松花江の水源として頭道江を取れるも、是れ蓋し吉林通志の編纂者の謬見に起因せるものならん。

吉林通志に源流と示せる所を摘記すれば左の如し

(一)松花江出其闔門池北、

(二)松花江屈西北流百餘里、額赫諾因河、三音諾因河、合哈勒璋

穆克河、白西南流來注之、

額赫諾因河、源出長白山西北、奔流激急、是以有額赫之名矣、
國語額赫不善也、土人謂之急泉子、西北流百餘里、與三音諾
因河會、河亦出長白山、北流數十里、哈勒琿穆克河、白西來入
之、河出斐德里山東、即西幹西行之大山、東去長白山頂二百六十里、即湯河也、土人亦謂之
溫泉、熱如沸湯、有氣上蒸如霧、東北流百餘里、會兩諾因河、東
流入松花江、

(三)又西北行三十里、雖哈河自西來入之、

雖哈河發源斐德里山北麓、兩泉岐出、行十餘里而合、北東流
百餘里入松花江、

(四)又西北行十餘里、那爾琿河自西南來入之、
那爾琿河源出佛思亨山、東北流百餘里、來入松花江、

(五)又北有尼石哈(河)の字を脱せるならん自西來入之、

尼石哈河亦出佛思亨山、合兩源、東北流數十里、入於松花江、
以上は頭道江の流域なり

(六)又直北行間百餘里、有大小圖拉庫河、尼雅穆尼雅庫河、合富
爾哈河、自東來入之、

兩圖拉庫河、皆源出長白山巔、正當鴨綠江源之北、在西曰安
巴圖拉庫、在東曰阿濟格圖拉庫、國語安巴大也、阿濟格小也、
圖拉庫瀑布也、激湍奔注、直下千尋、是以有圖拉庫之名矣、兩
水東西相距十餘里、分流北行百餘里、入於尼雅穆尼雅庫河、
河亦出長白山、合兩源北流、百數十里、折西流、受兩圖拉庫河、
屈西北流、百里許、會富爾哈河、富爾哈、今亦謂之富太河、出平
頂山西北諸峯、在黑山之北百里、亦幹山北行而分支、一趨東北一趨西北、
趨西北者爲尼雅勒瑪哈達、哈達、國語峰也、蓋琿春之

西界也、直西流百餘里、入吉林府界、又西百里許、折北流、與東

來之古洞河會、河亦出環春西界山中、直西流百餘里、入吉林界、北岸界敦化縣、又西百里許、與富太河會、合成一川、又

西百里許、折南流、與兩圖拉庫河會、合西流、受南來之塞珠倫

河、河長百餘里、折西北流、薩穆什河自東來入之、河出塞齊窩集、合兩源、西南流入富太河、合西

北流百數十里、入於松花江、

以上は二道江の流域なり。

今其記事に従ひて此の兩江の長さを比較するに頭道江は三百里(清里以下皆同じ)を踰えざるに、二道江は三百數十里に達し、地圖によれば其流域の面積亦た後者は遙に大なりとす。然るに通志の纂者が何に基きて正源を其短者小者たる西源と定めたるや。蓋し或は齊召南の水道提綱の記事を參考取捨するに當り其「松嘎里烏喇即古松花江也」といへるに従ひしも

のにして、共に新唐書に粟末水源於太白山、西北注它漏河」とあるに拘泥して、直に山頂の流水を探れるものならん。

通志の記事提綱と大同小異なれども、提綱の示す所通志よりも却て取るべきものあれば、左に其全文を掲げん

松花江古粟末水、亦曰速末水、鴨子河、即混同江、亦曰吉林鳥喇、有數源、皆出長白山北之支峯、

其東有二源、正當鴨綠江源之北者、一曰阿几八兔拉庫、北流下、其東(西の誤なり)十數里曰阿母八兔拉庫、亦北流下山、數十里合焉、又北曲曲百數十里、有泥牙母泥牙庫河、自東南來會、泥牙母泥牙庫、源在長白頂之東北六十里支山中、西北流曰色禽、流二十餘里、有別源、自東來會、西北流百餘里、會前水也、既合西北流三十里、而活同几河自東、合東北之富爾虎河、西流來合焉、水

勢始盛

活同几河即混同江、有四源、出黑山之西麓、黑山在長白山頂之東北、行

也、西北流、合而西百里許、會東南來一水、又西會南來一水、曰混

同江、而西富爾虎河源出平頂山之西北諸峯、平頂山在黑山之北、行

東北、一趨西北、三源、一西北流、二西南流、而合西北流百里許、有一

水合二源、北自儼牙蠻哈達之南、合西南流來會、又南稍西南

而南百餘里、與東來之活同几河會、疑即金時按出虎水也、

二水既合西南流數十里、了(兒拖旋)河自南合二水來會、又西

流數十里、而泥牙母泥牙庫河自南來會、

於是折西北流、有色朱冷河自南來會、又西北百里許、松嘎里烏

喇、自南合諸水來會、以上是東源、即古名混同江也、

是に由て之を觀れば、齊召南は東源更に二源ありて、一は活洞

凡河即ち今の古洞河即ち古の混同江、二は白頭山北より發源する大小圖拉庫河なりとするものなり。其西源に就きて左の記事あり、

松嘎里烏喇即古松花江也、源出長白山頂北稍西、與阿凡八兔拉

庫、僅隔一岡、西北流出山七八十里、合南來一水、出長白山連西幹山、東去松花源六十里

西北流日厄赫諾引河、百六七十里許、有三引諾引河、合二源水

西北流、又合西南來自斐得里山之湯河、北流百餘里來會、斐得里山即西

幹西行之大山、東去長白頂二百六十里、又有雅哈河、自西南來會、又北流、有羅奇雅の誤

庫河西南自山中、合二源東北流、又合一水、百數十里來會、羅庫河二源出

大山、其南即佟家江源也、又北有那爾混河、合二水自西來會、又北有泥他什の

誤、哈河自西來會、又北即混同江自東來合、水勢益盛矣、

兩大源既合、北流受東來一水、又北受東來之色勒河、又北受西

南來百數十里之施哈那兒渾河、至此土名松嘎里烏喇、又北受東南來百數十里之三母石河、折西北流、而土門河西南自雞林哈達東北流、會數十水、經輝發城、那兒佛路城、而東北來會、亦巨川也、

齊召南は長白山の西北より流出する厄赫諾引河を取りて西源とし直に是を以て古松花江なりとし、松阿里烏喇なる土名は兩源合流點以下に行はるゝものとせり。然るに吉林通志の編纂者は松花江は闔門池より出で、西北流し厄赫諾引河は之に合流するものとせり。

康熙十六年(一六七七年)覺羅武穆訥等登山の記事に曰く
正南一峯、較諸峯稍低、宛然如門、池水不流、山間處處有水、由左流者則爲松阿哩烏喇、右流者則爲大訥陰河、小訥陰河、

左流といひ右流といふもの皆な南面して指示するものにして、正南一峰稍低くして門の如き形を成せりとは、池北の白巖層巖相對して立ち、其間に一溝ありて松花江の水源となるものに當るべく、南は恐らくは北の誤なるべし。茲には池水流れずといふも、其後三十五年(康熙五十年)烏拉揔管穆克登の定界の際、朝鮮人金慶門等登山の記事によれば、

有池如顛穴、周可三十里、深不可測、四壁削立、若糊丹埴、圻其北數尺、水盛溢出、爲黑龍江源、

といひ、池水の溢流して北流することありしは疑を挿むの餘地なく、近時實測の白頭山頂地形圖を檢するに、同じく正北に一溝ありて池水の漲る場合に流出口たるべきを認む。

抑松阿哩烏喇は滿洲語天河の義にして、白頭山頂の池水よ

り流出する韓人の所謂天上水なるもの、即是ならざる可らず。現に吉林通志の附圖には吊天水として之を示し、二道白河の水源とせり。露人アーネルト氏の實測に係る滿洲地質圖には池水は三道白河に流出するものとして點線を以て之を示せり。此二道白河及び三道白河は即ち大小兩圖拉庫河に相當すべく、恐らくは大圖拉庫河(即ち二道白河)が天上水又は吊天水即ち松阿哩烏喇の水源たるべく、圓錐形の山上より流下せるものが正北より西に轉じて厄赫諾引河に合すべしとは信ず可らざるなり。吾人は此水源より踪跡して、其二道江源流中の何れの支流たるやを確知するは、松花江の水系の重要なる一問題なりと信ず。吉林通志の編纂者は附圖に於て天河の水源を示しながら、反て水道提綱に拘泥して、幹支を誤り、闔門池よ

り流出する松花江は額赫諾因河と合して頭道江となるものとせるものゝ如し。

七、混同江の水源

混同江の名は遼聖宗太平四年(一〇二四年)詔して鴨子河を改めて混同江といふに濫觴す。其幹流は齊召南の水道提綱に認めたる活同几河、即ち今の古洞河にして、水源は黒山即ち北甌山の西北より發して北流し、折れて西流し、再び折れて西南して、富爾哈河、大砂河を容れ、兩江口に至りて娘々庫河即ち定界碑に所謂土門江と合するものとす。此河流は娘々庫河よりも流域廣く、水量多く、天上水の一綫火山の裾野を流下するものゝ比に非ざるなり。吉林通志には遼時鴨子河の號、特に専ら長春の一隅を指し、今日松花混同の二名は實に上下游の通稱

たりと謂へるも、遼の改めて混同江と名けたるは、恐らくは古洞河より嫩河合流點に至る間の源委の知られたるが爲めなるべく、金以後行はるゝ宋瓦又は松阿哩烏喇の名は天上水に基ける名にして、鴨子河、混同江に比して狭き部分に使用せられたる地方名なりしに、金が長白山を發祥地とせる頃より廣き意義に用ゐられたるものならん。

八、粟末水の水源及粟末靺鞨部落の位置

松花江即ち古の粟末水なりとは普通信ぜらるゝ所なるが前に述べたるが如く、鴨子河即ち混同江なる名稱は遼の盛時今の古洞河より伯都訥に至る河流に用ゐられ、松花江即ち松阿哩烏喇の稱は金以後廣く用ゐらるゝに至れるものなれば粟末水が天上水より流下する今の二道江の流に當れるもの

と速斷するを得ず。然るに吉林通志の如きは粟末、宋瓦、速末、松花を以て同一の語の轉音とし、全く同一の流を指すものとせり。宋瓦、松花の松阿哩の轉音たるは疑なきも、粟末、速末をも直に轉音とは看做し難きなり。

吉林通志、松花江之水第一」と題して其劈頭左の記事あり
長白山在吉林東南、去府城六百餘里、高二百餘里、其巔有潭、曰
闕門、周二十九里有奇、松花江出其北、松花江即混同江也、本名
松阿哩、烏拉、魏曰速末水、唐曰粟末、遼曰鴨子河、改曰混同江、混
同之名始見於此、金元及明皆曰宋瓦、明宣德時、始有松花江之
名、粟末、宋瓦、速末、松花、聲轉字通、實皆一水、混同則水之一名、非
兩江、而自古以來、稱號多殊、源流復舛、重紕賾謬、特爲疏通、而證
明之、

といひ、次に元明一統志及び黃氏今水經の誤謬を指摘せる後、更に乾隆帝御製の松花江詩の註に

松花江本以松阿哩烏拉得名、松阿哩國語天河也、

とあるを引きて、

是知粟末諸名、實皆松阿哩一聲之轉、而殊名異號、於此兼賅、と云ひ、其異稱の下に含まるゝ流域の各異れるを指示して曰く、

第唐時粟末之稱、僅至嫩江而止、遼時鴨子河之號、特專指長春

一隅、而今之松花江混同二名、實爲上下游之通稱、然取發端高遠

之義、則自長白山以下、宜定曰松花江、論其受三江

嫩江、烏蘇里江、黑龍江

大、則自嫩江以下、始宜稱曰混同江、會典圖說如此因地定稱、各有攸屬、義

符於古、名應其實、則源流不紊、而名號秩然矣、

粟末、鴨子河の局部的名稱たりしは首肯すべきも、松花、混同の二名を全く同一の源委を指すもとのとするの誤れることは既に述べたる所によりて明かなり。

今唐より以前速末水、涑沫江、又は粟末水の名を以て知られたる河流の位置を考ふるに、魏書、北史及ひ新唐書の勿吉即ち靺鞨國の記事に據りて略ぼ推知し得べきなり。魏書に勿吉國は高句麗の北に在りて、國に大水の濶さ三里餘なるあり、速末水と名くといひ、北史に粟末部高麗と接し、毎に高麗に寇し、白山部は粟末の東南に在りといひ、新唐書は同じく粟末部は最南に居り、太白山に抵り、高麗と接し、粟末水に依りて以て居り水は太白山に源して、西北の方它漏河に注ぐといひ、粟末の東を白山部と曰ふといへり。

三史中魏書卷一百列傳に記する所左の如し

勿吉國在高句麗北、舊肅慎國也(中略)去洛五千里、自和龍北二百餘里、有善玉山、山北行十三日、至祁黎山、又北行七日、至如洛環水、水廣里餘、又北行十五日、至太魯水、又東北行十八日、到其國、國有大水、濶三里餘、名速末水、其地下濕(中略)國南有徒太山、魏言太白(中略)延興中遣使乙力支朝獻、太和初又貢馬五百匹、乙力支稱初發其國、乘船泝難河、西上至太淦河、沈船於水、南出陸行、渡洛孤水、從契丹西界、達和龍(下略)

北史卷九十四列傳に記する所左の如し

勿吉國在高句麗北、一曰靺鞨(中略)去洛陽五千里、自和龍北二百餘里、有善玉山、山北行十三日、至祁黎山、又北行七日、至洛環水、水廣里餘、又北行十五日、至太岳魯水、又東北行十八日、到其

國、國有大水、濶三里餘、名速末水、其部類凡有七種、其一號粟(粟の誤)末部、與高麗接、勝兵數千、多驍武、每寇高麗、其二伯咄部、在粟末北、勝兵七千、其三安車骨部、在伯咄東北、其四拂涅部、在伯咄東、其五號室部、在拂涅東、其六黑水部、在安車西北、其七白山部、在粟末部東南、勝兵並不過三千、而黑水部尤爲勁、自拂涅以東、矢皆石鏃、即古肅慎氏也、東夷中爲強國、所居多依山水、渠師曰大莫弗瞞咄、國南有從太山者、華言大皇、白土二字を誤り合して、一字とせるものにして、土は下の俗に連ね讀むべきものならん、俗甚敬畏之、(中略)隋開皇初、相率遣使貢獻、(中略)其國西北與契丹接、每相劫掠、(中略)然其國與隋懸隔、唯粟末白山爲近(下略)

新唐書卷二百一十九北狄列傳記する所左の如し

黑水靺鞨居肅慎地、亦曰挹婁、元魏時曰勿吉、直京師東北六千里、東瀕海、西屬突厥、南高麗、北室韋、離爲數十部、酋各自治、其著者曰粟末部、居最南、抵太白山、亦曰徒太山、與高麗接、依粟末水以居、水源於山、西北注它漏河、稍東北曰汨咄部、又次曰安居骨部、益東曰拂涅部、安居骨之西北曰黑水部、粟末之東曰白山部、部間遠者三四百里、近二百里、白山本臣高麗、王師取平壤、其衆多入唐、汨咄安居骨等奔散、寢微無聞焉、遺人迸入渤海、唯黑水完疆、分十六落、以南北稱、蓋其居最北方者也、

此等の記事に據れば、粟末と白山部とは東西相接し、白山部は高麗に臣たりしことあり、粟末部は其西に居りて高麗と境を接し、之に寇せることあり。汨咄部又は汨咄部は粟末の北に居りて今の伯都訥の地名は此部落の遺稱を存せるものなる

へく、安車骨又は安居骨部は其東に居れるものにして、即ち今の阿勒楚喀に相當すべく、拂涅部は寧古塔地方にして吉林外記其他諸書に見ゆる佛訥和なる地名は其遺跡なるべし。近時曹廷杰の東三省輿地圖説の窩稽説に記する所も亦略ぼ同一の見解なるも略して記せず。

是に據りて之を觀れば白山部は、白頭山の附近、即ち主として二道江頭道江の流域に割據し、粟末部は今の輝發河の流域より兩者の合流點以下現今の吉林府附近に至る地方に割據せるものなり、從て粟末水なるものは、白頭山上より起る松阿哩烏喇又は古洞河を水源とせる東源を指さずして、輝發河そのものを以て粟末水とすべきに似たり。粟末部居最南、抵太白山、亦曰徒太山、與高麗接、依粟末水以居、水源於山、西北注它漏河。

と見えたる、所謂太白山なるものは、孤立せる白頭山を指さずして、是より西及び西北に延びたる山地の全部を指さすものにして、山に源すとの語は必しも白頭山より流出するを意味せずとして解すべきなり。

輝發河は松花江の西源にして、其流域二道、頭道兩江を併せたる東源と伯仲する一大河にして、其長さ七百餘里ありて、水量の大なること又之に匹敵するものなることは齊召南既に之を認め、吉林通志も亦た之に従へり。而して此河流は獨り水量に富めるのみならず、其谿谷に沿ひ廣濶なる原野ありて、其地勢は險阻礪确にして平地に乏しき東源と全く趣を異にせることは、近時内外旅行者の報告に徴して明白なり。海龍城、柳河鎮、朝陽鋪、寬街等の人煙稠密なる都邑は此の谿谷に沿ひて

發達し、吉林南部に於て重要なる農産地たり。

吉林通志松花江東源の叙述に接續して左の記事あり。

輝發河一名柳河、源出奉天通化縣界、南山城北流七十里、經北

山城南、合白銀河、東北流二十里、經海龍廳東、合押鹿河、大沙河、

又東流三十里、經朝陽鎮西、合伊通河此奉天伊通河也一日統河與在吉林者別又東合

三屯河、又東流十餘里、經輝發城北、又名輝發江、又東流十餘里

合亮子河、蝦蟇河、又東北流入吉林伊通州東南界、南岸仍隸海

龍、當石河自北來注之、又東逕茶條崴子、又東逕欒家屯、南受交

河、一作角哈河、源出海龍廳四方頂子山、北流數復東合二分河、即梭爾和也、出伊通州

十里、入輝發河、西岸仍隸海龍、自此而東、河之南岸亦入吉林界、又東北逕欒家岡北、受巽

山屯河、河出伊通州東南牛心頂子山、南受托佛河、一呼託佛畢拉、源出伊通州東南大北岔山、又東北逕窟窿

山南、受報馬川河、出伊通州東南三岔山、兩源北受細鱗、石頭二河、河並出州東南

三箇頂子山，南流入輝發河。又東北逕亂泥溝北，受通順屯、陳家屯二河，南受橫德屯

智德屯二河。諸河並出伊通州東南諸山。又東北受富太河。河出伊通州東南松樹頂子山，屈南流復西合小水二入輝發河。

又東北受色勒河。河出伊通州東南四方頂子山，北流西合小水二，東合小水一，北注輝發河。又東北逕永福屯

北，受獨立屯、黑石頭街、豬犴礮子諸河。並出伊通州東南孤頂子。北受頭二三

五道諸溝河。并出伊通州東南松陰。又東北呼蘭河自北來注之。河出伊通州東南

流七十餘里。南受法河。即發河也，土人謂之法畢拉，國語謂河為畢拉，或於畢拉更加小字，誤也。源出伊通州東南大旺屯，東流而北，南合小水一，東合小

水一，北流百里許，入輝發河，是為法畢拉口，與呼蘭河南北相直如十字焉。折東北流，河之北岸入吉林府界，又

東三十餘里，南受蘇密河。河出伊通州東南大肚川，西受小水一，北流七十里，入輝發江。又東有公河，自

南來入之。公河即滾河，公滾聲轉，國語曰固恩，則滾字之切音。本曰公畢拉，畢拉或作別拉，今遂呼為公別拉河，則誤之甚，亦出伊通州東南大肚川兩源，岐發東受小

水一，北流六十餘里，入輝發河。又東受大簸箕河，又東受小簸箕河。河並出伊通州東南，南簸箕

入輝發河。又東受南來小河五。曰五道溝、四道溝、三道溝、二道溝、頭道溝，並入輝發河。又東北逕

夾信子、大萬兩河自南來入之。河出伊通州東南那爾轟嶺，東北流七十餘里，受南來小水一，又北流受西來小水一，又東北

流小萬兩河自西來入之、少東受南來之家基河、又直北百里許、由夾信子東入輝發河、其東岸皆吉林府界、又東北兩岸皆吉林府界

矣、又東北金沙河自西北來入之、即奇爾薩河也、源出吉林府西南牛心頂子山、東南流七十八里、受西來小水一、折東流

受北來小水一、又東南逕密什哈屯西入輝發行、又東流逕輝發河卡倫北、入松花江、

此河自發源處、東北行七百餘里、合小水之有名者、四十餘、凡伊通州東南、吉林府西南諸山、泉流畢滙、水勢幾與松花江相埒、是以土人稱其下流、總曰吉林烏拉也、

茲に記せる「南受蘇密河」の蘇密は水道表に於て粟末の轉音なりとせり。

齊召南の水道提綱に掲ぐる所は大同小異にして、特に山嶽の叙述に詳なり。此書は輝發河を呼びて土門河と云ひ、左の記事あり。

土門河出柳邊外之雞林哈達、在興京東北百六十里、英額城東

南百五十里、其山高峻、縣亘、派自長白山、而西主斐得里山、折而西北、爲佟家江源大山、又西爲黑林嶺、又西爲哈達、連峯不斷、河有三源、合而北流、折而東北行二百數十里、而西南來之古溝河、合諸水來會、

以上は輝發河の東源なり。其西源に就き連續して左の記事あり。

古溝河較土門河更長、湧出柳邊英額東南數十里之戈里朱墩山中、二源合而東北流百餘里、有朱墩河、自西南山中來會、其西北即胖色城也、折而東數十里、經薩哈亮山南麓、朱魯莽喀北麓、有阿母八煤和河、自西北山來會、又東北經兩山間、有富爾哈河、自西北山來會、又東北有角河、自西北山來會、又東北有羊谷河、自西北山來會、折而東流、而土門河自南來會焉、

以上記する所の古溝河は吉林通志に所謂輝發河一名柳河の上流の部分に當るべし。

二水既合、又東會南來之三屯河、又東北數十里、經輝發城北、又東北受北來之德佛河、南來二百里之拖欣河、又東北受北來之牛里順河、南來之喀喀河、又東北受北來之禾土河、又東北受北來之佛多少河、以上北來數水、皆出西北之所尤母阿戀山者也、稍東受北來之輝發河、又東北受南來之梭爾火河、又東北受北來之胡蕭蘭の誤河、受南來之發河、又東北經那兒佛路城之北、受西北來之布喀河、及北來之拖母十河、水又東北受南來之敦屯河、又東北受西北來之雞兒薩河、即源出西北之哭勒嶺東之哭嶺諾窩兒者也、又東北百里與松花江會、東西兩源合流の後、經る處及ひ受くる所の諸水の名を列舉

せる後に曰く

此河自柳邊外、東北行六百餘里、合水之有名者十九、凡自戈爾朱墩之北大山以東、自雞林哈達及黑林嶺大山以北、諸流畢滙、水勢與松花混同相敵、是以土人呼其下流、總曰雞林烏喇也、

是に由れば松花江の東西兩源合流點以下を示すには吉林烏喇なる地方的名稱を用うべきなり。

松花江の兩源に關して支那地誌に見ゆる所は此の兩書に於て略ぼ盡せり。

上に述べたる粟末水の位置如何の問題を解決するに、更に別種の材料あり。吉林通志卷二十四輿地志十二城池の部に蘇密城あり、(吉林)城西南三百餘里に在りて、周圍六里、東西に二門あり、内城ありて、周四里なり、城址尙ほ存し、城の近傍十餘里の

間四面に皆な小古城ありと記せり。

蘇密城 城西南三百餘里、周六里、東西二門、内有子城、周四里址尙存、近城十餘里間、四面皆有小古城、探訪とあるもの即ち是なり。

最近實測の地形圖に就きて蘇密城址を索むるに、合流點より輝發河を溯ること約六十里なる寛街の南に在りて、南より來りて輝發河に會する蘇密溝其傍を流る。城址は南北に長き長方形を成せるも、土壘を繞らせるものなるや、或は石壁又は瓦壁なるやを詳にせず。地圖に示す所の蘇密溝は即ち通志(卷二十輿地八)水道表に法河と滾河との間に擧げたる蘇密河即粟末之音に當れり。此の河流は輝發河の小支流にして、固より直に古粟末水に當るものとは謂ひ難く、今の蘇密河又は蘇密溝なる

名稱の起原は、寧ろ蘇密城の近傍を流るゝによるべし。故に蘇密城即ち粟末城なるものが果して粟末靺鞨の遺跡なりや否やを知るは、最も必要なり。未だ現場に就きて考古學上の探検を試みざれば、直接の證左を有せざること甚だ遺憾なるも、幸にして新唐書地理志に見ゆる賈耽道里紀より推定し得べきものあり。

賈耽の考定せる渤海に通する交通線路二あり。一は陸路營州より安東都護府を經るものにして曰く「自都護府、東北經古蓋牟新城、又經渤海長嶺府、千五百里至渤海王城、城臨忽汗海、其西南三十里、有古肅慎城、其北經德里鎮、至黑水靺鞨千里」と。此の忽汗海は今の畢爾騰湖にして、渤海王城は今の寧古塔城の西南數十里の地に在りしなり。

二は海路山東の登州より鴨綠江口に入り、江を溯りて松花江の上流に入るものなり。曰く「登州東北海行〔中略〕至鴨綠江唐恩浦口〔中略〕自鴨淙口、舟行百餘里、乃小舫泝流東北三十里、至泊汭口、得渤海之境、又泝流五百里、至丸都縣城、故高麗王都、又東北泝流二百里、至神州、又陸行四百里、至顯州、天寶中王所都、又正北如東、六百里、至渤海王城」。

今此の鴨綠江より松花江上流に入る線路を追跡するに、先づ泊汭口の位置を考ふるを要す。泊汭口は滿洲源流考に博索府といひ、宋明の間に婆娑府と書せるものにして、源流考は之を釋きて「滿洲語山陰也」とせり。道里記又た安東都護府より「南至鴨綠江北泊汭城、七百里、故安平縣也」といへり。羅念庵の廣輿圖には婆娑の地名あれども、其位置を精密に知る能はず。現今

の地圖を按ずるに、安平河の北に蒲石河あり、或は泊沟の轉音にして、今尙ほ地名に存するものなるやも知る可らず。地圖上に於て現江口より蒲石河口に至る距離を測るに、道里記所謂百三十餘里の概數に一致するが故に、泊沟口の位置は今の九連城よりも上流に位し、安平河又は蒲石河の近傍に在るべく、今の九連城近傍までは大船を通じ、是より以上は小なる河船にて浜りて泊沟口に達せるならん。

泊沟口以上七百里の行程、皆な鴨綠江に沿ひ、丸都を以て今の輯安縣(洞溝)の近傍に在りしものとすれば、神州は今の臨江縣(帽兒山)の近傍なりとせざる可らず。

神州より顯州に至る陸行四百里の行程は方向を示さざるも、顯州より正北及び東に向ひ、六百里にして渤海王城に達す

との記事より、逆に推定し得べきなり。畢爾騰湖の近傍より、西に向ひ鄂穆索の西方なる張廣才嶺を踰え、是より折れて拉法河に順ひて南に降り、更に幹流吉林烏拉を溯りて輝發河の溪谷に入らば、直に前に述べたる廣濶なる寬街の平地に出づべく其距離大約六百里なり。是より更に輝發河を溯りて三屯河に入り、南に向ひ東南に折れて帽兒山に達するの距離、同じく大約四百里なり。故に道里紀の距離の計算より前に述べたる蘇密城を渤海の顯州の遺址ならんと推定するは決して牽強ならざるべし。

曹廷杰の東三省輿地圖説に渤海建國地方考あり、同じく新唐書に據りて渤海王城に至る道里を考へ、顯州を以て長白山の西北、今の地圖に那丹佛勒城示せる處の近傍に當てたり。略ぼ正しかるべきも那丹佛勒城は吉林通志に

従へば蘇密城と異なるなり。

渤海は本と粟末靺鞨にして、白山部西に居れるものなり。新唐書によれば高麗の滅ぶるや其部衆を率ひて挹婁の東牟山を保つ、其地營州の東二千里に當れりと云ふ。東牟山の位置明かならざるも、同じく遼東の山地に屬すべし、其後萬歲通天中（六九六年）契丹李盡忠の逼る所となり。東の方遼水を渡り太白山の東北を保ち、奥婁河を阻して壁を樹て、自から固めたりといふは、亦今の吉林省一帯の地方に割據し、英額威遠兩門の方面に防禦線を張れるを謂ふべし。果して然りとせば、今茲に發見せる顯州は中原京德府にして、渤海國の發祥地とも謂ふべき處ならん。

吉林通志城池の卷に擧ぐる所の諸城中、蘇密城は最も大な

るものに屬し、内城あり、且つ近傍に數多の小古城ありと云ひ輝發河谿谷平野の中心なりしは明かなれば、一層此の假定を助くるものなり。

之を要するに、列擧せる所より明かなるは輝發河は松花江の西源にして、東源と伯仲せる大河なるのみならず、其谿谷は平地多く、農産地として遙に東源たる火山裾野地方に優り、而して此の谿谷に渤海國中京顯德府と推定し得べき一大古城址ありて、今尙ほ蘇密城即粟末城の名を以て知らるゝの事實なり。此西源は又た白山部の西に割據せる粟末靺鞨の根據地なる可きを以て、吾人は唐時代の粟末水なる河流は彼の東源の細流天上水即ち松阿哩烏喇より起り二道江となり、深山の間を流るゝ松花江を指すものに非ずして、此の土地膏腴なる

平野の間を流るゝものを指せるものと信ぜんと思ふ。而して輝發河流域は最も遼河の流域に近く、現今の開原奉天の方面より最も達し易き地方なれば、此溪谷が之に隣接せる西方の支那人に先づ知らるゝことも亦寧ろ當然なるべしと思ふ。

九、松花江名稱の變遷

以上論じ來れる所に據り、松花江が古代より種々の異なる名稱を以て知られし真相は略ぼ明白なりとす。初て史乘に現はれたる涑沫、速末又は粟末なる名稱は、最も支那文明に接近し其影響を受けて滿洲に相當の文物を具備せる王國を建てたる民族、粟末靺鞨の居住地を流るゝ河流に屬せる名稱なり。鴨子河、混同江の名稱は初めて遼史に現はれ、鴨子河は契丹の

東境に在る局部的名稱にして、滿洲の住民の白頭山より流出する天上水、即ち松阿哩烏喇の名稱は女眞が盛大となりて金國を建るに及び後漸く著はれたるものにして、混同、松阿哩、鴨子の名稱は各區別せられて用ゐられしが如し

金史に「上京路水有混同江松阿哩江鴨子河」といへるに對し、滿洲源流考吉林通志等の編者は何れも金史の誤謬を喋々すと雖も、少くも混同江の水源と松阿哩烏喇との區別は當時は認められ、清朝に至りても盛京通志の地圖に残存し、齊召南の如きも亦た之を認めたるものなるべし。鴨子河に至りては下流の一局部の異名なり。或は金朝に於ては此等の名稱は各使用の範圍に多少の區別ありしを以て、金史之を列舉せるに非ざるを得んや。其合流して同一の河流たるべきものに用ゐられ

たりとの理由により、河名を列擧せるを非とするは或は妥當ならざるべし。

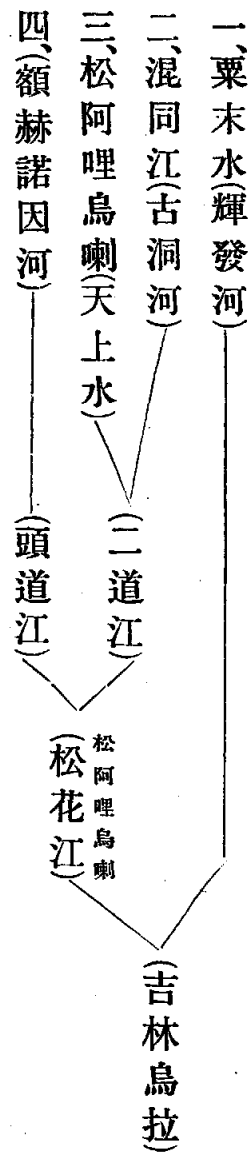
蓋し遼の頃に至りて松花江の東源の地理明瞭となり、先に粟末水が幹流と看做されしに對し、洪大なる意義を有する混同江なる名を以て全河系を示し、其水源として東源の最大川たる今の古洞河を取り、以て混同江の幹流とせるものなるべし。清朝に及びて東源に頭道江、二道江の區別を生じ、白頭山の西北より流下する額赫諾因河を以て松花江の幹流と定め頭道江と呼べり。然るに關門池より流出する河流は大圖拉庫河となりて二道江に注ぐものにして、西北より流下するものは松阿哩烏喇の義に合はざる可きなり。恐らくは清朝の學者齊召南の如きは新唐書の粟末水の記事を「水源於山西北、注它漏

河を解し、太白山を以て長白山系全部の名稱とせずして、白頭山とし、直に其西北なる額赫諾因河を取りて之に當てたるものならん。然るに吉林通志の編纂者は更に誤りて、天上水が額赫諾因河を容れて頭道江を成すものとせるなり。

此の如く時代と共に變遷を重ね、現今支那人の認むる所松花江の幹流とする頭道江なるものは無意義にして、全く卓上の空論に基きたるものなり。若し松花江なる現名稱の語源に重きを置くものとせば、天上水を以て松花江の水源と定むべく、若し混同江なる名稱と松花江とを同意義として、其主要なる河流を取りて幹流とせんには、古洞河を以て水源と定むべく、若し又た古來の歴史を尊重して粟末水を取りて其幹流とせんには輝發河を取りて水源と定めざる可らず。少くも粟末、

混同、松阿哩三源ありて第四の額赫諾因は水源とするに足らざるものなり。左に其相互の關係を示すに水系圖を以てせん。

松花江水系圖



十、完顏城の古址

咸鏡北道の會寧は豆滿江に臨み、鏡城より豆滿江北なる間

島即ち海蘭、布爾哈通、嘎雅三河の平地に通ずる要衝にして、江北の女真民族即ち朝鮮史乘に所謂野人の部落は清朝の興る以前、會寧の對岸に住居し、愛親覺羅氏の地を空くして西に移れるまでは藩胡の名を以て朝鮮に附屬せり。高麗朝の時即ち女真民族が支那に侵入して金國を建てたる後、蒙古民族の爲めに滅されたる頃、豆滿江沿岸に住民せるものに關しては史乘徵す可き資料に乏し。

明治四十年十月間島踏查の際偶然會寧の西三十韓里の雲頭城と稱する古城址に於て金末女真民族の遺跡を發見するを得たり。本篇に附せる發掘物の寫眞は其主要なるものなり。茲に其梗概を報告して此發掘物を説明すべし。

雲頭城は一名完顏城といひ、豆滿江の茂山より屈曲東北流

して來り西に折るゝ處に當り、南部の山嶽より頂上平坦なる邱阜の北に向ひて江に達するものあり。城は此邱阜を被へる玄武岩の臺地(韓人の德トキ又は坪と稱するもの)を利用して築かれ、周圍は全く玄武岩盤の斷崖にして、一部のみ人工を以て補へるも、石壁は皆な板狀の玄武岩を用ゐたり。其中央の稍窪める處に數戸の韓民住居し、韓稱浦乙下堡鎮といひ、民家の傍に城内の中央を占めたる厦屋の遺址ありて古屋瓦累積せり。此處に宋徽宗皇帝御筆と稱する雲淵の二字を刻める古碑の横れるあり。鰲山邑誌(會寧郡地志)には一に完顔城又は五國城と呼ぶといひ、宋徽宗の捕虜となりて青衣行酒せる跡とし、郡中に存する皇帝陵を以て其墳墓なりとせり。五國城が此處ならずして松花江の下流に在るべきは疑なき所なるも、此城址を

完顔城と呼べるは自から別に由來する所ありしは、發掘物によりて之を證することを得たり。

城址に於て南門の石壁中より「己丑年」の文字ある赤色の屋瓦破片を發見し、更に中央厦屋址より「己」字反文「天」字「王」字反文「六月」字「地」字等ある赤色又は灰色の破片を發見せり。蓋此地方は渤海の國を建てたる頃より金朝に亘りて城居せることあるべく、金の初めて起れる時高麗の尹瓘が北征して城を築けることあるべく、李朝に入りては現に英宗の六鎮を置くに當りて一時雲頭城に守備隊を設け後之を撤せることありしが故に、己丑の干支は未だ直に建築の年代を確定するに足らず。然れども天王なる尊號を稱せるもの此地方に割據せることありとせば、此古瓦製作の年代は初めて定まるべきなり。恰も

之に當るものは金末(一、二一五年乙亥より一、二三三年癸巳に至る)の蒲鮮萬奴の遼東に據れる事蹟なりとす。

蒲鮮萬奴は金の宗室にして、又た完顏萬奴ともいひ、金貞祐二年(宋嘉定八年乙亥即ち一、二一五年)咸平宣撫使となり、遼東遼西地方に據りて金に叛ける耶律留哥を討ち、戦ひ敗れて散卒を收めて東京(遼陽)に走り、遼東に據り亦金に叛き自立して天王と稱し、國を大眞と號し天泰と改元せり。既にして耶律留哥の攻むる所となりて東に奔り、遁れて海島に入り、明年元に降り留哥の所部の亂るゝや、復た遼東を襲ひて東京を取り、東夏と稱せり。

萬奴の據れる地方は魏源元史新編に依れば、南は高麗に接し、北は混同江に界し、留哥の東西樓と壤を接し、聘を通ぜりと

いひ、張志淵の大韓疆域考には高麗史を引きて高宗十一年(金哀宗元年即ち一、二二四年)東眞國より使を送りて東眞國は北青に於て高麗は定州(永興咸興間の定平ならん)に於て榷場を開き互市せんと請へりといひ、翌十二年朔州に寇し、十四年には定、長二州に、十五年七月には永興の北なる長平鎮に寇せりといへり。此等の記事より推せば、萬奴は咸鏡北道より今の韓滿交界地方に割據せるものならん。其東に奔りて海島に入るといふも恐らくは咸鏡北道及び豆滿江下流の海に瀕せる地方に來れるを謂ふならん。

萬奴は建國十九年にして、元太宗五年癸巳(一、二三三年)皇子貴由等之を伐ち、國は亡び萬奴は虜となりたるも、女眞人の高麗に入寇するものは高宗の末年(三十六年即ち一、二四九年)ま

て止まざりしことは高麗史に見ゆ。蓋し東眞國は滅びたる後、女眞民族は依然として此地方に住居せるなり。

魏源の元史新編耶律留哥傳に記する所左の如し
留哥自立爲遼王、九年甲戌金主遣青荀招降不從、復遣宣撫使完顏萬奴領軍四十餘萬攻之、留哥逆戰於歸仁縣北河、金兵大潰、萬奴收散卒奔東京、於是留哥盡有遼東郡、遂都咸平、號中京、敗金左副元帥耶律都之兵、十年乙亥留哥破東京、衆勸其稱東帝不許、與其子來朝於太祖、未歸而其國爲部下所據、五載易四主、留哥始引蒙古、契丹、高麗、及東夏國軍十萬討平之、時混同江以南爲完顏萬奴所據、號東夏國、留哥止據混同江以北、東樓西樓之地、自有傳、東夏國者金遼東宣撫使完顏萬奴也、金自明昌以後、遼東均據於愛王父子、連年用兵、分見紀傳、衛紹王三年耶

律留哥自立於遼東、宣宗貞祐三二の誤年乙亥三月命遼東宣撫使萬奴、選精銳屯瀋州、廣寧、以候進止、時留哥叛據自立已五年、金方外鬩蒙古、内生變逆、不暇規遼東、至是南遷汴京、始有宣撫之命、五月燕都陷、十月萬奴遣使報敗留哥之捷、或言軍實敗績、走保東京、旋僭稱天王、國號大真、兀真合台傳作女真、改元天泰、時金已遷汴、遼西盡爲元有、與遼東專委萬奴、而効尤變亂如是、旣而留哥進攻東京、陷之、萬奴率衆十餘萬、遁入海島、又明年丙子太祖十一年冬十月、萬奴來降、以其子帖哥入侍、及留哥所部內亂、萬奴復襲據東京、僭稱東夏、其地南接高麗、北界混同江、與留哥東西樓、接壤通聘、故戊寅年曾遣其元帥胡土、將兵助留哥、攻咸舍、太宗五年癸巳二月、以高麗請降而萬奴不服、命皇子貴由及諸王按赤台討之、九月東夏平、諸王班師、命太弟列里古台、鎮守遼東、萬奴割

據自乙亥至癸巳、凡十九年、其本紀列傳、又有木華黎、石抹、耶先、哲伯等於太祖七年壬申、襲東京之事、與留哥傳不符、蓋誤以北京爲東京、辨詳石抹、耶先傳據本紀及金史及耶律留哥等傳、錢大昕十駕齋養新錄卷九萬奴の項に左の記事あり。

太祖紀十年、金宣撫蒲鮮萬奴、據遼東僭稱天王、十一年蒲鮮萬奴降、旣而復叛、僭稱東夏、按東平王世家、癸巳太宗五年、五與皇子貴

由攻完顏萬奴于遼東平之、完顏萬奴金內族也、自乙亥歲、聚衆據東海、號東夏、至是凡十九年而滅、此萬奴之氏、一以爲蒲鮮、一

以爲完顏、未審孰是、木華黎傳世家、同金史宣宗紀、作蒲鮮、太宗紀但書平萬奴而不言皇子貴由國王塔思當據世家補之

此他元史卷百十九列傳六列傳七等にも蒲鮮萬奴に關する記事あり。

今雲頭城の位置を觀るに、豆滿江の中流に位し、會寧の小平

野に臨み、北は肥沃なる間島地方を控へ、南は輸城の溪谷を通じて鏡城の平野を制し、退守進取共に便なる地勢を占む。後李朝英宗の三年再び此城を修めて會寧と相對し、北方の鎮とせるも是が爲めなり。此に發見せる蒲鮮萬奴の遺跡は或は其根據地の居城なりしならん。

大韓疆域考に此城に關する記事あり。曰く

甫乙下鎮、西有大塚、自古稱皇帝塚、衆小塚累々圍繞、謂之侍臣塚、至今耕者往々得崇寧錢、豈此非徽宗所葬乎、

按ずるに崇寧は宋徽宗の即位二年より六年に至る(一、一〇二乃至一、一〇六年)年號なるも、金桓宗の末年崇寧なる年號を用ゐたること二年(一、二一三、及一、二一四年)なれば、此崇寧錢なるものは果して此宋錢なりや或は金錢なりやを知る可らず。

此古錢も亦た研究の價值あるものなれども、未だ之を獲ざれば、他日の探究者を待つ。

本編の起稿に當り史料は學友内藤虎次郎君より供給せられたるもの多きに居り、就中篇末に附せる蒲鮮萬奴の事蹟は全く同君の搜索によりて之を明にするを得たるものなり。附記して感謝の意を表すと云爾。